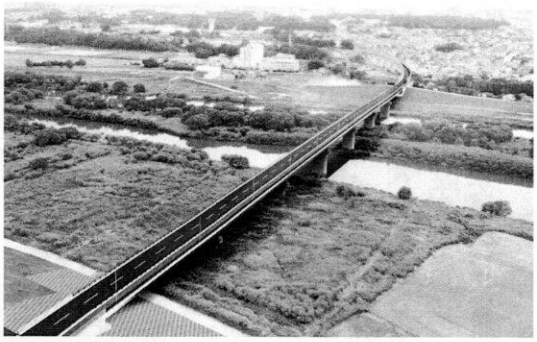
江戸川に架かる橋

三郷流山橋が開通



三郷流山橋「東葛の橋めぐり事典」より

慶応4年（1868）4月3日、新政府軍の隊長香川敬三の一隊が、近藤勇ら新選組包囲のため、ここ羽口の渡しを渡った。当時ここは吉川と柏を結ぶ重要な渡しであった。

江戸川は、古くは渡良瀬川の下流で太日川と呼ばれた流路の定まらない川であった。江戸時代の利根川の東遷工事に伴い、江戸川と呼ばれるようになった。江戸幕府はこの川に橋は架けなかったが、流山や野田などの下総と、三郷や吉川などの武蔵との交流は盛んであった。江戸川には38か所もの渡船場があった。

享保14年（1729）幕府は金杉から平方新田までの江戸川の流路を直線に付け替えた。この辺りの江戸川は蛇行して流れていて常に水害に見舞われていた。この開削によって、深井新田と平方新田は川を挟んで東西に分断されてしまった。そうなっても両新田は下総のままであったから、分断される前と同じように付き合いは続く。「渡し」は無くてはならない交通手段であった。

深井新田の渡しは大正時代に廃止されたが、そのほかの渡しも昭和35年ごろまでには姿を消した。

昭和に入ると交通の主役は陸上交通へと移り変わり、江戸川に架橋の機運が高まっていった。

流山には「渡し」が8カ所もあったのに、一般道の橋は、昭和10年架橋の流山橋（昭和40年老朽化により架け替えられた）だけであったので、渋滞は当たり前のことだった。この三郷流山橋の開通は、交通渋滞の緩和だけでなく、物流輸送など経済効果も大きいと期待されている。（石垣幸子）

『東葛流山研究』39号「東葛の橋めぐり事典」に「着工進む三郷流山橋」として写真特集が掲載されていた。その三郷流山橋が、令和5年11月26日に完成、開通した。場所は埼玉県三郷市前間と流山市三輪野山を結ぶ橋である。かつてこの三郷流山橋のあたりには羽口の渡しと呼ばれる渡船場があった。

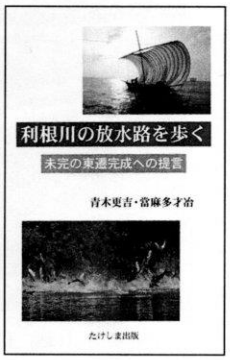
会員の本

著者　青木更吉・當麻多才治

『利根川の放水路を歩く』

～未完の東遷完成への提言～

たけしま出版



江戸初期、利根川は江戸湾へ注ぎこむ川であった。

栗橋から南へ60キロで江戸湾へ流れ込んでいたのを、利根川東遷によって、東へ１２０キロも延長して太平洋に注がせて以後、利根川の中下流は水害に悩まされるようになった。

放水路とは水害を防ぐための水路である。

江戸川は利根川から水を分けて流れる川である。かつては棒出しがあり、今は関宿水閘門が流量を調節している。江戸川の放水路は、中川や坂川のように洪水時には江戸川へ放水する放水路と江戸川の水を直接東京湾へ流す放水路がある。

利根川本流には支流から利根川への放水路はあるが、利根川本流には放水路が一本もない。

江戸初期にすでに2代将軍徳川秀忠の運河構想があり、江戸期には3回も印旛沼から江戸湾への計画があったが成功していない。昭和44年に利根川～印旛沼～新川～東京湾の水路が完成した。が、放水路ではなく疏水路であった。

現在放水路が無くても何とかやっていけるのは、洪水時には渡良瀬遊水地、田中遊水地、菅生調節池、稲戸井調節池に貯蔵できること、また、沼や水田もかなりの水を貯蔵することが出来る。関東地方整備局はこれら池の貯水力増強に取り組もうとしている。

利根川の放水路を歩いたお二人は、利根川東遷完成への提言として3つの提言をしている。

提案1、新利根川を放水路として復活させる。新利根川とは利根町押田から霞ヶ浦南端まで直線に近い水路が掘られたが廃川になった。

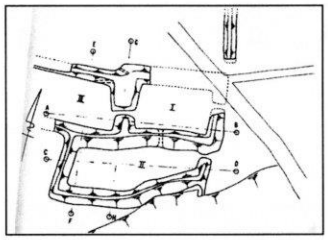
提案2、利根川放水路は地下トンネル方式で

提案3、霞ヶ浦～北浦～鹿島灘を連携した新利根川下流放水路の実現

（石垣幸子）

ちば文化資産に選定

下総小金牧の捕込跡



初富向山馬込
（鎌ヶ谷市史資料集より）

青木更吉

この度、千葉県誕生１５０年を記念して「ちば文化資産」１５０件の１つに、中野牧捕込跡（鎌ヶ谷市初富本町２丁目）が追加選定されたそうである。小金牧の調査、研究にいくらかでも携わった者の１人として歓びたいと思う。

房総の牧には小金牧、佐倉牧、嶺岡牧の３牧があって、それぞれ徳川幕府の直轄の牧であったから、江戸時代は、優秀な馬を育てることが重要な政策であったのだ。

牧は馬を育てる所、今の牧場であった。房総の台地や山地は馬の食糧となる草があって、馬を育てるのに都合がよかったようである。また、所々に池や湧水があって、これも馬の育成には欠かせないものだった。

牧の馬は「野馬」と呼ばれ、野生の馬ではないが、飼い馬（農家の馬）でもない。その中間の馬である。野馬は徳川様の持ち物だから、牧から逃げ出したりしても乱暴してはならないとされていた。

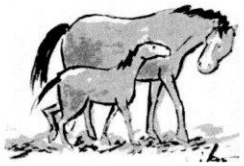
さて、話題は捕込なのだから、野馬捕りを語らなければならない。野馬捕りは年１回、野馬を追ってつかまえる行事で、つかまえる場所が捕込である。福島県相馬では野馬追いというが、房総の牧では野馬捕りと言っても、どちらもやることは同じと考えていい。

野馬捕りには何千という農民たちが参加する。小金牧には高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧の５牧があって、それぞれが野馬捕りをする。野馬捕りは大勢集まってワイワイさわぎたてて祭りのような楽しみもあったが、忙しいのに２日も３日も動員される、税金を納めるようなものだった。

野馬捕りは野馬追いの総仕上げで、百匹もの野馬を捕込へ追い込む。３歳馬を幕府へ納める馬、競り市に出す馬（これが大半）、牧へ残す馬には焼き印を尻に押す。

捕込は「込め」「馬込」とも呼ばれる。ここの捕込は元は小倉源介さんの土地で「馬込食堂」をやっていた。この捕込の所へ道路を通す計画があった時、小倉さんは「文化財を残せ」と保護を訴えて昭和42年に県史跡として保護された。私が訪ねて行った時、「もったいないから駐車場にしたらと言う人もいるけどやはり貴重な文化財を守りたい」と言っていた。その後、国の歴史遺産に指定された。

この捕込土手は、元文年間（１７３６～４１）の構築である。だから、２９０年もほぼ昔の姿をとどめている。惜しいことに欠けた部分が多いが、捕込３区画のうち１区画は完全に残っている。

野馬捕りの最終日は、江戸からも見物に来たという。江戸の親戚を呼んだらしい。何百という見物客で、よく見える土手の上は押すな押すなの盛況だった。お祭りのような騒ぎで、おでん屋、焼き鳥屋等の出店がずらり並んだという。娯楽の少ない時代だったから、野馬捕り見物が年１回の楽しみだったようである。

私が『小金牧　野馬土手は泣いている』を出した時、「小金牧野馬土手ベスト10」を発表したが、１位に選んだのがこの中野牧捕込だった。迷いに迷って選定したのだが、県史跡、国史跡、さらには「ちば文化資産」に指定されて嬉しい限りである。